第五詩集

『疾駆する風たちに』

向 殿　充 浩

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

目次

疾駆する風たちに	2010.3.30
神々の大地に	2011.8.13
石たちの声が凍てつき	2012.3.1
小さな石たちのつぶやきに耳を傾け	2012.3.3
雪の原野に	2013.12.28
風を切って鳴り響く音たちの向こうで	2014.1.2
ぼくは孤高の神に向かって	2014.1.3（最新改定：2016.11.3）
ひとつの石がぼくを叩いた	2014.1.3
天の窓からこぼれ落ちる夢の破片	2014.1.3
ぼろをまとって旅に出よう	2014.2.23
数限りない無数の石たちが砕ける荒野で	2014.3.28
Four Walls	2014.5.2
架空世界の底で / チベットの風に	1999.8.15
平和な時代に	2014.5.29
ぼくの仲間たちに	2014.5.29（最新改定：2016.11.3）
カシスで石や魚たち・Ⅲ	2014.5.29
宇宙からの風を感じ	2014.5.29
雨粒の音に耳を傾け	2014.6.8
ぼくの空の上では	2015.2.8
無題（ぼくたちの夢はどこで潰え）	2015.6.18
茫洋たる道の途上で	2015.8.9（最新改訂：2019.3.30）
美しい一瞬はこの地上のどこかにしかない	2015.7.20
夢の破片に	2015.9.12
無音の領域に	2015.9.14
小さな時間の上で	2015.9.15
せせらぎのほとりで	2015.9.20
夏の野で	2015.9.21
架空世界の底で / 砂曼陀羅を描く	2015.7.20
賢者とともに過ごした秋の一日	2015.6.17
空の青	2015.8.8

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

疾駆する風たちに

求道者たちが舞う広大な平原で
太古の風たちがきらめくように駆け抜ける。
大地に刻印された始源的な霊感に
存在の根拠を失った者たちの無数のまなざしが注ぎ込まれ、
硬直した石たちの像は
無言のまま月明かりを浴び、
そして、ぼくが突き崩した土塊たちの声が
研ぎ澄まされた大気の中に拡散している。

冷たい張り詰めた気の中で
透徹した笑いを湛える石たちの列。
目覚めているのか、
求道者たちの奏でる韻律に頭を垂れている者たちよ、
耳を澄ましているのか、
天空の涯てでの神々の戦いを見上げている者たちよ。

きらめくような燐光を発し、
この宇宙に共鳴する無数の風たち。
その風の中を駆け抜ける
トキの断片を打ち砕くなにものでもない者たち。
ぼくは太古の石を奏で、
名もなき者たちのために碑文を刻み、
そして、沈黙する遊星の荒々しい鼓動を
孤独な求道者の一人として
祭壇の上に鳴り響かせる。

漆黒の暗闇に放たれる一条の発光、
けれど、それは、ぼくたちを一瞬のうちに置き去りにして

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

未知なるものたちの中へと疾駆する。
砂塵を舞い上げて、
静寂を積み重ねる瞬間を飛び越えて。

[付記]
また、この詩の一部に、長屋和哉さんの CD『ILLUMINATIONS』に付いていたノートから採っている言葉や表現があることを付記しておきます。

2010.3.30

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

神々の大地に

神々の大地に、
この茫洋たる大地に、
赤い月がぽっかりと浮かび、
沈黙の時がぼくの上を無造作に通り過ぎた。
岩に刻み込まれた時の半鐘が
遊星の上の誰でもない者たちの上に鳴り響き、
孤独な石たちのつぶやきが
風の鳴りやんだ冷たい大気の中に反響した。

その大地で、
神々は神器をかざして戦いの踊りを踊り、
荒れ騒ぐ虫たちのざわめきをよそに、
時間の断面を次々と切り裂いている。
創造の中に真理を見出そうとする神は
この時間の中の錯乱をきっと嘉するに違いない。
そして、宇宙の淵から復活した破壊の神は
己の踊りを喜悦に満ちて踊るだろう。

けれど、原野では、
叫び出さずにはいられない孤高者たちの声が
今なお石たちの上を疾駆している。
そして、
時間の中に囚われた求道者たちは、
神によって描かれた創造を拒絶し、
積み上げられた祭壇を打ち壊し、
大地の上に石たちのつぶやきを刻印するだろう。

そうだ、この大地では、
未知なるものを求める声が途絶えたことはついぞなく、
だからぼくは風の鳴り止まない茫洋たる大地の上で
求道者たちとともに問いかける。
そして、不思議な声に呼び起こされた者たち、

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

未知なるものに向かって投げ出された者たち、
時間の破片を拾い集め、
存在することを嫌悪する何ものでもない者たちが、
奇怪な図形によって世界に反旗を翻し、
音の破片によって世界を切り裂こうとするだろう。

この巨大な宇宙がたった一つの真音に震撼し、
閉じ込められていた闇の声が解き放たれる日がきっと来る。
その日、存在の価値を問う荒々しい彷徨が
宇宙の涯てから響き渡り、
地球を巡る空間のはざまで、
創造の是非を賭けた新たな戦いが沸き起こるだろう。
風を切って野を駆ける孤独な者たちが
絶壁の上に浮かぶ三日月に真摯な祈りを捧げ、
冷酷な神のつぶやきが刻印された大地の上で、
ぼくたちは新たな祭儀を執り行うだろう。

この大地にむせび泣く巨大な情念が、
遊星の上でただ生起しただけというおびただしい者たちの
幾重にも折り重なった時間のひとつひとつから滲み出す情念が
ぼくたちの上にただただ重々しくのしかかっているのだ。

広大な夜空からこの荒野に星々が降り注ぐ日、
張りつめた大気を切り裂く神々の叫びを聞き、
何ものでもない者たちとともにぼくは大地で踊り狂い、
吹き抜ける風を浴び続けた。
巨大な狂気が今なお覆いかぶさっているこの遊星の上で、
けれど、
荒れ騒ぐ大地の上に放置されている小さな石たちのつぶやきを
ぼくは導師たちとともにただ拾い集める。
むき出しの魂が漂泊するこの荒野に、
真音が滴り落ちていた。

2011.8.13

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

石たちの声が凍てつき

石たちの声が凍てつき、
埃っぽい砂の荒野が
空虚な時間の上に覆いかぶさっていた。
風たちが駆け抜け、
空の星たちはひゅうひゅうと流れていた。
あなたが打ち込んだ楔は
今なお存在そのものを大地にくぎ付けにし、
ぼくが打ち壊した夢たちは
破片となって散らばっていた。

ぼくに微笑みかける小さなつぶやきと、
広大な大気の中で光を発する
たったひとつの真音の響き。
その音を探し求める求道者たちの列が
この荒野に延々と続き、
何ものでもないものたちのつぶやきを拾い集めるぼくの仲間たちが、
黙々と、そして、うつむいて歩いている。

光は空からは降り注いでこない。
真理はこの地上のどこにもなく、
ただ空無の中に霧散している。
錯綜した線の領域に、
そして
混沌とした色の領域に、
世界の深奥への道が、
けれど、
狂気への道が続いている。
だからぼくは、

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

音を求め、形を求め、
けれど、
空虚な存在の抜け殻となったこの大地の上で
ただ求道者たちとともに舞い踊る。
この地上には一切があり、
そして、何もない。
ただ、無へと通ずる微笑みが、
顔を歪めたぼくたちを通り越して
時間の断点を照らしているだけだ。

2012.3.1

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

小さな石たちのつぶやきに耳を傾け

小さな石たちのつぶやきに耳を傾け、
形とならなかった幾多の夢をキャンバスに描いた。
そのたあいない、そして、途方もない試みが
幾重にも幾重にも折り重なり、
この大地の上に狂気の像を作り上げている。

荒れ騒ぐ風たちの下で天を仰ぎ
遠い星々を見つめ続ける小さな生き物たちと、
不思議な呪文を唱え
未知なるものへの祈りを捧げ続ける導師たち。
宇宙の涯てから響いてくる韻律に乗って神々が舞い踊り、
道の上では
求道者たちが世界を呪っている。
ぼくたちの夢はとうに潰え、
ただ膨大な追憶が大地にへばりついているだけ。
そして、遊星の斜面からは
記号となったものたちが転げ落ち、
宇宙的形象を祀る神々が
仮面をかぶって土を砕いている。

霧散してしまったおぞましい記憶が
喜びの失せた大地の上で砂と化し、
翼を失くした天使たちが
うつむいて世界を見下ろしている。

たった一つの時間、
けれど、涯てることのない茫漠たる時間が
ただ滴り落ちている。

2012.3.3

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

雪の原野に

雪の原野に、
そして、薄っぺらなぼくの心に、
かすかな青空がのぞいた。

カール・ストーンの音を聴きながら
雪を踏みしめるぼくの足元では、
昨日の夢が次々と砕け散った。

雪山で吹きすさぶ轟音が地上に舞い降り、
雪の灯篭がかすかな焔を揺らめかせている。

あなたの夢は雪の中にうずもれているだろう。
ぼくの夢は形となることはないだろう。
空の上の勤行の声だけが
時間の重みの上に降り注いでいる。

2013.12.28

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

風を切って鳴り響く音たちの向こうで

風を切って鳴り響く音たちの向こうで、
沈黙する石たちの列が語りかけるちっぽけな時間。
その時間の断点から浮かび上がる
茫洋たる思念と荒れ騒ぐ情念。
砂たちの一粒一粒がその思念と情念とを噛み込み、
土くれたちは透明な大気に向かって怒りを沸騰させている。

けれど七人の楽師はただ音を叩き、
音を紡ぎ、音を消してゆく。
ただ奔放に、音の波を、この大地に、この空間に、
そしてこのちっぽけな時間の中に解き放つ。

それがこの遊星のできごと、
この無機質の時間の中でのできごとなのだ。
乾いた風の駆け抜ける大地で新たな真音が滴り落ちる日、
音の破片がただ空の中に散逸していた。

（タージマハル旅行団に捧ぐ）

2014.1.2

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくは孤高の神に向かって

この広漠たる大地の上で、
ぼくはただ言葉を繋ぎ合わせ、ただ石を打ち鳴らしている。
神々の哄笑の響くこの小さな時の断崖で、
ぼくはただ沈黙し、ただ粘土を捏ねている。
この遊星の上で沸騰する饒舌から遠ざかり、
清澄の天使たちが踏みしだいた光の破片を
ぼくはただ拾い集め、ただ祭壇に捧げている。

遠い天空の彼方に潜む孤高の神よ、
この宇宙の中心に座る聖なる絶対者よ、
なぜあなたはこの混沌とした世界を
ただ存続せしめるのか？
なぜあなたは真理が具現すべくもないこの世界を
打ち壊さないのか？

求道者たちの祈りがあなたに届くことはないし、
石たちの声、風たちの声、
そして、何ものでもない存在者たちの声が
あなたの心を動かしたことも一度もない。
石たちはただうずくまり、
この遊星を覆う大気は張りつめたままだ。

曼陀羅の中に秘められた世界の秘密は
いったいいつ解き明かされるのか？
この宇宙の底に沈む大地の上には
いったいいつ真の音が鳴り響くのか？

でもぼくは明日も言葉を繋ぎ合わせ、

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ただ、石たちを打ち鳴らすだろう。
孤独に、神々の声を聞くこともなく、
ただ、ひゅうひゅうというこの広漠たる荒野のただ中で
何ものでもないものたちの声を聞こうとするだけなのだ。
ぼくにできることは、ただ石たちの声、風たちの声に耳を傾け、
砂の上に結晶化させることだけなのだ。

ゼロと一、
それから無限、
光のあやふやなこの世界の向こうで、
けれど、神もきっと
孤独に石を削っているにちがいない。

2014.1.3（最新改定：2016.11.3）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ひとつの石がぼくを叩いた

ひとつの石がぼくを叩いた。
ひとつの風がぼくを捉えた。
この宇宙の向こうには別の神がいる。
この大地でこの遊星の神々は死に絶えてしまったけれど。

2014.1.3

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

天の窓からこぼれ落ちる夢の破片

天の窓からこぼれ落ちる夢の破片、
ぼくが見ることのない時間の外の世界。
涯しない忘却の向こうにあるかもしれない
新たに生まれ出ようとする者たちの声。

でも、ぼくはかたくなに耳を閉ざしている。
そして、密林の中の廃墟の神殿の上で、
賢者とともに単音の響きを空にただ解き放つ。

あるべきものはこの世界にはなく、
瓦礫に類する膨大なものどもが
大地の上に積み上がっているだけの世界。

天の窓からこぼれ落ちる夢の破片、
真理は光を失ったのかもしれなかった。

2014.1.3

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼろをまとって旅に出よう

ぼろをまとって旅に出よう。
磨り減ったわらじを履いて埃っぽい道を歩こう。
興奮に満ち、憎悪と喧騒が形作る世界はもういい。

夜空からは星が降り注ぎ、
寺院では壊れた仏頭が久遠の微笑を続けているだろう。
ぼくにはこの荒れた広野が似合っている。
人生の内に目を向ける者たちが織りなす息苦しさに
ぼくは決別してきたのだ。

小さな古びたあばら家を見つけて一夜の宿とし、
無意味に死んでいった石たちの声を拾い集め、
ひとりで真音を捜し求める旅を続けよう。

神々の意思はぼくには分からない。
この歴史の意味もぼくには分からない。
でも、石たちは今もなお、
荒れ騒ぐ大地の上に置き去りにされているのだ。

2014.2.23

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

数限りない無数の石たちが砕ける荒野で

数限りない無数の石たちが砕ける荒野で、
ぼくは縹渺たる風たちとともに、
時間だけがただ流れ去るのを見つめた。

その荒野では、
絶望の淵に立って神に祈りを捧げる求道者たちが
かすかな燈明を求めて黙々と歩き、
けれど、空を見上げて呪いの言葉を発していた。
無垢の女神のまなざしは巨大な時空を駆け、
けれど、荒れ果てた寺院では、
今日も老いた導師が呪術的な言葉を唱えていた。

虚無の中へと転化される真音への道、
そして、形となることのない真理への道。
空なる世界の上では、
宇宙の風がびゅうびゅうと吹きすさび、
顔を歪めた石たちの声がぼくたちを駆り立てている。

ぼくが刻んだ石、
そして、ぼくが描いた錯綜する線の領域。
けれど、天使たちは
もはやこの荒野に降り立ちはしないだろう。
神々はきっと、この沸騰する世界から離れ、
無垢なる夢の中に還っているのだ。

だからぼくは今日も石を砕いた。
そして、疾駆する風たちの中に、
石の破片をそっと投げ入れる。
新しい風を呼び起こすために。
小さな灯りを灯すために。

2014.3.28

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

Four Walls

ジョン・ケージの夢に灯明を灯し、
彼の砕いた音たちを探し求めよう。

ぼくは山の中の古びたお堂に座り、
しとしとと降り続く雨の音に耳を傾ける。

小さなトンボがやって来て、
水辺の木の上に止まった。

空からしたたり落ちる音たちの破片。
彼の見た偶然の向こうにある世界が
ぼくの中でかすかにうごめく。
雨の山寺で。

（John Cage “Four Walls”に）

2014.5.2

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

架空世界の底で / チベットの風に

チベットの風にヤルツァンポ川の青い流れが滔々と輝き、
雪をいただく山々が遠く連なっていた。
荒れた大地にはタルチョがはためき、
オボが道の両側に次々に続いた。

村の小さな寺院では、
五体投地で老人が祈りを捧げ、
若い僧がひとりで読経の声を上げている。
そして、村人たちのまなざしはあくまでも柔らかく、
子供たちはにこやかに近くまで寄ってくる。

けれど、その大地の上で、
憤怒神は世界を突き破る踊りを踊り狂い、
弥勒菩薩は五十六億七千万年先の世界に
まなざしを投げている。
真理がすべての極に向かって突き当たる曼陀羅の世界、
その異質の世界で、
ラマ僧の勤行の声が寺院の中にこだまし、
千界の神々が交合を遂げる。

けれど、外に出ると、
再び、八角街の喧騒がぼくたちを迎えた。
マニ車を手に道を行く老人たち、
五体投地を繰り返す信者たち。
そして、澄んだ高地の光の下に土の家が点々と続き、
ヤクたちが、のんびりと時間を食んでいた。

すべてを融解する超脱した世界と

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

おだやかで朴訥とした光景。
でも、ぼくが投げ入れた小さな石は
この広大な大地の上で置き去りにされ、
老いた導師の聖なる言葉は
古びた寺院の祭壇で干乾びているのだ。

カンパラ峠に登ると、タルチョが飄々とたなびき、
青いケシがひっそりと咲いていた。
ヤムドゥク湖の青い水は朗々と光をはね返していた。

この異界に投げかけられる未知なるものへのまなざしは
いったいどこに凝集するのだろう。
でも、ひび割れた世界で、ここではなお、
澄んだ光が降り注いでいるのかもしれなかった。

（チベットにて）

1999.8.15

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

平和な時代に

平和な時代の鐘が美しく鳴り響き、
平穏なさざめきの中で
ぼくたちは窓の外の牧歌的な光景を楽しんだ。
砲撃と爆撃で軋んだ世界の追憶は
忘れ去られ、風に吹き払われて、
時間の向こうへ行ってしまった。
ぼくたちは毎日、テレビの向こうの世界を楽しみ、
新しい紛争の話も
ぼくたちの生活からは遠く隔てられている。

そして、ぼくたちは
静かな美術館の中に結晶化している
幾多の芸術家たちの叫びを、
ただ楽しみ、そして眺めている。
いったい誰が、ヴォルスの絵の前で、
人生の悲嘆を味わいつくし、
絶望の淵で魂を締めつけられるというのか？

でも、仏典の中の賢者の言葉が
ほんとうに意味を失ったわけではない。
真音を求める音楽家たちの音は、
今も未知なるものに向けられた求道者たちの心を
照らし出している。

だからぼくは、
この大地に刻印されたあらゆる出来事を想起し、
新しい言葉を連ねて、祭壇の上に置いてゆく。
すべてが時間とともに流れ去るこの遊星の上で。

ぼくの試みに何の意味があるかは分からないけれど。

2014.5.29

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくの仲間たちに

茫洋たる灼熱の道、
真理を砕き続けた荒々しい風と
沈黙するだけの頑固な岩たち。

その大地でぼくたちは音を探し求め、
空から落ちてくる光を探し求め、
ただ繰り返し石を打ち鳴らしている。
揺らぎ続ける陽炎のような気の向こうに
誰もが夢を失う未知なるものたちの領域がある。

錯綜する無数の図形たちが織りなす混沌とした世界、
そして、不吉な星たちが天を巡る不条理な世界。
その干乾びた大地の上で、
敬虔な言葉は風の中に吹き払われ、
みずみずしかった思想は
祭壇の上に置き去りにされている。

誰かが虚空に向かって叫んだ。
でも、虚無に向かい合うものたちは
誰も答えようとはしない。

石たちだけが風の中にうずくまっている荒野で
小さな月だけが
煌々と光を照り返している。

2014.5.29（最新改定：2016.11.3）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

カシスで、石や魚たち・Ⅲ

カシスで、石や魚たち、
小さな音たちの息づく空間で、
夢の破片が形づくるちっぽけな世界。
何ものかから自由になろうとする言葉たちの列。

その世界の底で石たちは、
光がただ流れ去る青い虚空を見つめている。

ゴーゴーと星々が渦巻く巨大な宇宙で
何ものかがこね回す透明な時間。

空からこぼれ落ちる砂粒たちの記憶が
ぼくのキャンバスの上で飛び跳ねている。

（ヴォルスに捧ぐ）

2014.5.29

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

宇宙からの風を感じ

宇宙からの風を感じ、
打楽器の即興的な響きが交錯する空間で、
ひとりの導師が古い経典の言葉を朗誦する。
色鮮やかなマンダラの上で、
瞑想を続ける菩薩たちと踊り狂う鬼神たち。
そして、交合を遂げる神々とともに
世界を破り開く声聞たちの列。

ぼくは世界の底で怯える石たちとともに
宇宙の風を肌で感じ、
大地に渦巻く求道者たちの声に
導師とともに灯りを灯す。

菩薩たちが舞い降りる祭壇の上で、
新しい音が打ち鳴らされている。

2014.5.29

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

雨粒の音に耳を傾け

ひとつひとつの雨粒の音に耳を傾け、
小さな石たちの発する微かな光とともに、
時間の外にある未知なるものたちにまなざしを投げる
ぼくの仲間たち。

石たちのざわめきがぼくたちの心をざわつかせ、
木片を打ち鳴らすものたちの音が
その小さな世界に共鳴する。

この空の向こうでは、
今日もシヴァ神が破壊の踊りを踊り、
神々が新しい世界の創造を模索しているかもしれない。

異界から舞い降りる
目には見えない不思議な形象たち、
石たちの夢を紡いでいる雨粒の静けさ。
ぼくたちの音が虚空の中に掻き消え、
微かな風が草の匂いを運んでくる。

石たちとともに過ごした雨の一日。

2014.6.8

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

ぼくの空の上では

ぼくの空の上では今日も縹渺たる風が吹きすさび、
ぼくの胸にはぽっかりと穴が開いて、
切り刻まれた夢の破片の数々が
小さなきらめきを伴って降り積もり続けている。
世界は寂々として涯しなく、
ぼくの描いた音たちは道の上で砕けている。

だから、
さあ、舞い降りてくるがいい、
異界に輝きを放つ羅神たちよ。
さあ、大地を踏みしめてみるがいい、
この世界に異を唱える求道者たちよ。

けれど、静かになった地平の上では
石たちが押し黙ったままなのだ。
空の中に砕ける夢の破片、
ぼくの仲間たちが
その破片をキャンバスの上に埋め込んでいる。

2015.2.8

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無題

ぼくたちの夢はどこで潰え、
今、どこに埋もれているのか？
ひとりぼっちのぼくがただ追い求めた何かは、
いったいどこで形となっているのか？

ぼくの心の大地は悲しみに燃え上がって慟哭し、
打ち壊された世界の幻影は
乾いた風の中に吹き払われている。
踏みしだかれた夢の数々をぼくは拾い、
ただとぼとぼと道を歩いているだけだ。

街にはしたり顔の人々の笑いと
よそよそしい敵意が溢れ、
荒野では風を悼む者たちの声だけが
ぼくの心に共鳴している。

神々の哄笑を聞き流し、土塊を蹴ったぼくの仲間たち。
けれどぼくは、石を打ち鳴らす世界に還るだろう。
丸い球形の星の上で、
時間にひびが入る日にはきっと。

2015.6.18

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

茫洋たる道の途上で

茫洋たる道の途上で
軋んだ機械の音が轟音をとどろかせ、
大地からは人々の饒舌が溢れ出し、
都市では巨大な虚構が渦を巻いていた。
薄っぺらな喜びを飽くことなく追い求める試みが
映像となって電波に乗り、
人々の生活の上に覆い被さっていた。

そんな世界の中で
いにしえの時代に光を放った真理は
顧みられることもなく図書館の中に埋もれ、
真理を求める求道者たちは
世界の片隅に追いやられていた。

でも、彼らの響かせた音はこの世界のどこかで共鳴し、
道を求めることのなくなったこの世界の涯てで
けれど清新の滴をしたたらせている。
美しくかたどられた世界の裏では
存在の割れ目から峻烈な風が次々と吹き出しているし、
時間の断点には答えのない苦悩が凝集しているはずなのだ。

収容所で暮らした放浪の画家は
錯綜した線によって
酔いどれ船が運ぶ夢の軌跡を描き出したし、
偶然性に目を向けた即興音楽家は
瞑想的な音の曼陀羅の中に
真理を見出そうとしたものだった。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

たとえ世界が欲望と欲望のぶつかり合う
羅刹たちの世界のようであったとしても
真の光を求める求道者たちが歩みを止めることは
決してないだろう。
そして、この大地に存在させられた小さな石たちは
きっと叫び続けるに違いない。
膨大な時間の瓦礫が織りなす
うっそうとしたこの世界の中で
何ものかが語り出そうとしているのだ。

でも、宇宙を形作った神は創造の神秘を秘したまま、
永劫の時間を偉大な微睡の中で過ごし続け、
破壊の神は喜悦に満ちた心で
いつか破壊の踊りを踊るだろう。

ぼくはひとりで荒野の中の廃墟の寺院を訪ね、
花が供えられることもなくなった仏頭に祈りを捧げた。
そして、不思議な音の鳴る石を打ち鳴らし、
星々の輝く空に向かって響かせ続けた。
きっと世界は明日も未来に向かって歩みを続けるだろう。
でもぼくの仲間たちもきっと
新しい音を響かせ続けるに違いない。
この荒野で、
夢の破片が語りかけるこの小さな時間の中で。

2015.8.9（最新改訂：2019.3.30）

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

茫洋たる道の途上で （旧原稿）

茫洋たる道の途上で
軋んだ機械の音が轟音をとどろかせていた。
その大地からは人々の饒舌が溢れ出し
巨大な虚構が渦を巻いていた。
都市では心を喜ばせる幾多の試みが
飽くこともなく追い求められ、
テレビ局は人々の興味を刺激する映像を電波に乗せ、
笑いを引き出すためのさまざまな趣向を日々凝らしていた。

そして、そんな世界の中で
いにしえの時代に光を放った真理は
顧みられることもなく図書館の中に埋もれ、
真理を求める求道者たちは
世界の片隅に追いやられていた。

でも、彼らの響かせた音はこの世界のどこかで共鳴し、
道を求めることのなくなったこの世界の涯てで
けれど清新の滴をしたたらせているのだ。
美しくかたどられた世界の裏では
存在の割れ目から峻烈な風が次々と吹き出しているし、
時間の断点には答えのない苦悩が凝集しているはずなのだ。

収容所で暮らした放浪の画家は
錯綜した線によって
酔いどれ船が運ぶ夢の軌跡を描きだしたし、
偶然性に目を向けた即興音楽家は
瞑想的な音の曼陀羅の中に
真理を見出そうとしたものだった。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

たとえ世界が欲望と欲望のぶつかり合う
羅刹たちの世界のようであったとしても
真の光を求める求道者たちが歩みを止めることは
決してないだろう。
そして、この大地に存在させられた小さな石たちは
きっと叫び続けるに違いない。
膨大な時間の瓦礫が織りなす
うっそうとしたこの世界の中で
何ものかが語り出そうとしているのだ。

でも、宇宙を形作った神は創造の神秘を秘したまま、
永劫の時間を偉大な微睡の中で過ごし続け、
破壊の神は喜悦に満ちた心で
いつか破壊の踊りを踊るだろう。

ぼくはひとりで荒野の中の廃墟の寺院を訪ね、
花が供えられることもなくなった仏頭に祈りを捧げた。
そして、不思議な音の鳴る石を打ち鳴らし、
星々の輝く空に向かって響かせ続けた。
きっと世界は明日も未来に向かって歩みを続けるだろう。
でもぼくの仲間たちもきっと
新しい音を響かせ続けるに違いない。
この荒野で、
夢の破片が語りかけるこの小さな時間の中で。

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

美しい一瞬はこの地上のどこかにしかない

小さな風が巻き起こした雪煙が
ぼくの目の前で美しく舞っていた。
青い空から降り注ぐ透明な光が
雪と岩の上で結晶化していた。

でもそれは遊星の片隅でのできごと、
小さく切り刻まれたぼくたちの時間の
ほんの一断片なのだ。

この遊星の上では、
幾多の諍いや憎しみが交錯し、
さまざまな怒号と慟哭が
今日も飛び交い続けている。
そして、宇宙の膨大な時間と空間の広がりの中の
ほんの小さなこの領域の中で
さまざまな欲望と妬みとが
際限もなくせめぎあっている。

美しい一瞬はこの地上のどこかにしかない。
けれど、それはどこかにはある！

ぼくは美しい緑の田んぼの広がる田舎に帰り、
向こうの雪の山と青い空を見上げた。
その空の向こうでは世界を創造した神々がこの世界を見下ろし、
破壊の神は世界を打ち壊す時を待っているかもしれなかった。

小さな音を紡ぎ、
世界の内の微かな響きに思いを馳せるぼくの試み、

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

錯綜した線で
キャンバスの上に真音を響かせる求道者たちの試み。

神々が創造したこの世界の底で、
石を削る何ものでもないものたちの歩みが
かすかに光を放っている。
小さな光の粒がぼくたちの夢にぬくもりを与え、
澄んだ風がぼくたちの心を冷ましてくれる。

美しい一瞬はこの地上のどこかにしかない。
けれど、それはどこかにはある。

2015.7.20

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

夢の破片に

秋の日の美しい光の下で、
透明な風がぼくたちの上を吹き過ぎていた。
野に広がるススキの穂が
軽やかになびいていた。

そして、夢の破片をリュックに放り込んで歩いてきたぼくたちは
誰もいない野の中で、
空から降り注ぐ小さな響きに
耳を傾けた。

この野の向こうには、
さまざまな情念の氾濫する世界、
清新の光を失った世界が広がっているかもしれなない。
でも、秋の光の下では、
コスモスの可憐さや虫たちの小さな吐息、
山々に広がる赤や黄色の色鮮やかな色彩が
ぼくたちの心を冷ましてくれた。

小さな池のほとりに腰を下ろし、
ふとリュックから夢の破片を取り出してみると
不思議な鼓動を耳にすることができた。

未知なるものへのまなざしが
真っ青な空に共鳴する秋の一日。
山から降りてくるひんやりとした風が、
ぼくたちの心の中で舞い踊っていた。

2015.9.12

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

無音の領域に

窓の外でたなびく
残光の中の雲の帯、
忌まわしい虚構と
捻じ曲がった奇怪なフォルム、

はるけさを呼び起こし、
漂う音に光を投げつけ、
でも、色のついた石を並べるだけの
錯乱と幻惑、

祈祷の言葉を失った赤ら顔の祭師と
不気味な記号を書き連ねるだけの占星術師、

潮騒のざわめきの向こうの無音の領域で、
けれど、ただ泥をこねるだけの青ざめた神、

石の上に響く雨の音、
仮借なく理不尽で
官能的なパラドックス。
少女たちの堅い蕾。

瓦礫を積んだ船が
時間の割れ目を渡っている。
無音の領域で。

(Terry Riley / Don Cherry, Koln Concert, 2.23.1975 を聞いて)

2015.9.14

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

小さな時間の上で

小さな時間の上で泥と化した詩的な言葉、
恍惚の中から遊離する土くれたち、
挽歌を奏でるトランペットが止み、
虫たちの騒ぎが続く宇宙的な時間が。

その中でぼくが傷つけた小さな石と
大地の上の透明な障壁、
誰かが夢見たかもしれない世界の向こう側、
そして、ただ土くれを蹴るだけの求道者たち。

宇宙を漂い、
自らの根拠を消し去ろうとする音の破片。
石を打ち続け、
もはや光となることのないぼくの仲間たちの声。

玉砂利の音と共鳴する空の青、
水の波紋に反響する光の渦、
不可解な敵意に満ちた銀河的な世界で、
ぼくの夢が紡いでいる小さな時間。

2015.9.15

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

せせらぎのほとりで

せせらぎの音が静かに響いていた。
その音に耳を傾けると
風が心地よく吹き渡ってゆくのが感じられた。

心を解きほぐし、心を鎮めて振り返ってみると、
炎を上げて燃え盛っていたものどもも、
轟音のような咆哮を生み出していたことどもも、
ただこの野に広がる枯葉のように
世界の静けさの中に瓦解しているだけなのが理解できた。

そうだ、
真理に至る光はいつも
平静な心で世界を見つめるところから発している。
そして、
どんな激情も、どんな高揚も
決して真なるものに行き着くことはない。

空を見上げると透けるような青さが心に響いた。
でも、そのはるけさの向こうに
まだ何かがある！
新しい音がぼくの中に
かすかに共鳴した一瞬。

2015.9.20

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

夏の野で

夏の野を歩くと
黄色い花、ピンクの花が咲き乱れ、
空には白い雲が湧き立っていた。

チョウチョが何匹もひらひらと舞っていたし、
草を踏むとバッタたちがぴょんぴょんと飛び跳ねた。
さわやかな高原の風が木々を揺らし、
ときおり、ホトトギスの澄んだ声が
野の静けさに響き渡った。

その光景は世界の一部でしかなかったかもしれないが、
でも、そこからはみずみずしい音の源が流れ出ていた。
草の上に寝そべると
空の青さが目に沁みた。
ふと回りを見回すと、
ハチやアブがぶんぶんと飛び回り、
アリたちが忙しく地面を駆け回っていた。
草むらからは
虫たちの鳴き声が騒がしかった。

夏の野で
ほんの一瞬覗き込んだ
ぼくたちの世界とは違う虫たちの世界。
風がぼくたちの存在の重さを
忘れさせてくれた夏の一日。

2015.9.21

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

架空世界の底で / 砂曼陀羅を描く

薄明りの下で砂曼陀羅を描いた。
音のない寺院の中、
ただ黙りこくって、
ひたすらに何時間も砂を落とした。
床の上ではさまざまな色彩が咆哮し、
神々の意思が荒れた時間を踏みしだく。
創造された世界の軋みが憤怒となって立ち現われ、
静謐の音は世界の中から掻き消えた。

でも、それは砂曼陀羅の世界だけではない。
外の世界も常にどよめき続け、
とどまることのない阿鼻叫喚が
大地から消し去られたことなど一度もないのだ。
心を鎮めることを知らぬ者たちが
この大地の上に殺伐とした騒ぎを巻き起こし、
人々の饒舌が
世の空気を騒然とさせている。

その世界の混沌を心に響かせながら、
ぼくは砂曼陀羅を描き続ける。
すると一滴の青い砂が
川のように広がって静謐の音をもたらし、
瞑想的な色彩の重なりが
道を啓こうとする求道者たちの心に反照した。
ひたすらに描き続け、
いつのまにか巨大な青が
世界を取り巻いているのをぼくは見た。
その青は世界の混沌の源かもしれなかったが、

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

そこからはたしかに光が発していた。

混沌を鎮めたわけではない。
世界の亀裂にぼくが夢の温かみをもたらしたのでもない。
ぼくは大きく息を吐くと、
砂曼陀羅を足で払い、
すべての色を床の上で混ぜ合わせ、
顔を歪めて寺院の外に歩み出た。
緑の野の向こうに雪の山々が広がり、
タルチョのはためきが心にかなった。

すべては砂曼陀羅のように、
一瞬のきらめきしかもっていない。
そして、ぼくはそんな遊星の上で、
ただ、あてどもない試みを繰り返しているだけなのだ。
でも明日もぼくは砂曼陀羅を描くだろう。
ぼくは迎えに来てくれていた
きたないなりの幼い少女と一緒に
夕暮れの道を歩いた。
この子にお菓子を買ってやろう。
そう思うと微かに心が微笑んだ。

2015.7.20

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

賢者とともに過ごした秋の一日

ぼくの夢がかすかに震え、
空の上を真っ青な風が吹きすぎていた。
大地に刻印された無数の慟哭は
膨れ上がっては大気の中に弾け、
掃き清められた寺院の庭には
意味を失った言葉たちが置き去りにされていた。

この小さな遊星の上で
ぼくたちの世界は清新の光を失い、
新たな混沌が澱んだ大地から噴き出し、
果てることなく押し寄せてきている。

でも、求道者たちの試みは
今なお、新しい音を宇宙の中に響かせようとしているし、
ぼくの仲間たちは今日もこの世界に
未知なる形を描こうとしている。

秋の日の柔らかな光の下で、
微かに震えるぼくの夢が世界に突き当たり、
けれど、不思議な鼓動が生まれてくる。
天を見上げていた小さな虫たちの息吹きが
ぼくたちの心を冷ましてくれる。

賢者とともに過ごした秋の一日。

2015.6.17

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

空の青

空の青、
そのはるけさの向こうで
小さな光たちに共鳴するかすかな音。
その音が
苦みの滲んだいにしえの記憶とともに
澄んだ透明な大気の中に降り注ぐ。

そして、青い空の下では、
踏みしだかれた夢の数々を
何ものでもないものたち、誰でもないものたちが拾い集め、
孤独な求道者たちは
打ち壊された世界の幻影を
さらに小さく砕いている。

地上で生み出された幾多の混乱は
瓦礫となって広大な大地の上に積み上がり、
敵意に満ちたまなざしが
混沌の渦巻く都市の中から次々にまき散らされ、
天を仰ぐものたちの慟哭は
ただ静かに燃え上るほかなかったからだ。

風を悼み、
荒野のただ中で燔祭をあげる
ぼくの仲間たちよ。
悲しみが染み込んだ世界の中で
ただ石を削り続ける
孤高の仏師たちよ。
さまざまな欲望の氾濫する遊星の上で

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.

誰がうつむいたものたちの声を
濁流のごとき時間の中から拾い上げるのか？
誰がひびの入ったこの世界の断点から
真なる音を響きださせるのか？

小さな生き物たちは息をひそめて天を仰ぎ、
置き忘れられた石たちは
ごうごうと風の吹き抜ける荒涼たる大地に
黙ってうずくまっているだけだ。

世界を創造した神々は
どんなまなざしでこの世界を見つめているのか？
世界を破壊する聖なる神は
どんな思いでその時を待っているのか？

、、、、、、、。
、、、、、、、。
空の青、
そのはるけさの向こうで、
けれど、透明な光が微かな夢を紡ぎ出している。

ぼくは石を打ち鳴らす世界に還るだろう。
ぼくは空の青に心を反照させるだろう。
世界にとどろく轟音が青い空に瓦解する日には、きっと。

（グスタフの第九交響曲に）

2015.8.8

著作権表示 @2024年 向殿充浩 All Rights Reserved.